

『篁物語』の表現の古態性

－音便形を中心にして－

中 村 一 夫

【キーワード】 篁物語 小野篁集 表記 音便 承空本 彰考館本 古態性

一 問題の所在

平安初期の文人、歌人として才名の高かった小野篁を主人公とする『篁物語』『小野篁集』（作者未詳）は、その成立の時期や経緯、および諸伝本の系統や本文の特質に関して諸説あり、いまだ明確な位置付けがなされないところが残されている。

現存する『篁物語』の伝本は、鎌倉時代後期に書写されたカタカナ書きの承空本『小野篁集』（冷泉家時雨亭文庫蔵）が最も古く、それとほぼ同一の本文を持つひらがな書きの宮内庁書陵部本（霊元天皇宸筆本）がある。さらに彰考館蔵の『篁物語』甲本（枅形本）と同乙本（袋綴本、原本焼失）とが知られている。書陵部本と彰考館甲本・乙本はいずれも江戸初期の書写である。これらに加えて、近時、安部（2020）および安部（2021）で、京都大学文学研究科図書館所蔵の二本（以下京大本A・京大本Bと称す）が影印で公開された。いずれも奥書に記されているとおり、近世書写の彰考館甲本および書陵部本の忠実な写本（孫本か）であることから、比較的新しいものであることは動かない。

中村（2022）では、『篁物語』『小野篁集』に使用される漢字を検討することで、安部（2020・2021）によって指摘されたこの物語の伝本の古態性について考察を加えた。安部（2020）は、彰考館甲本・乙本・京大本Aの最末尾文の直前に、およそ二文字文の空白があることを指摘し、これらを一括りにして「末尾有空白系統本」と称した。一方の承空本、書陵部本、京大本Bは最末尾文の直前に空白を持たず、これらをまとめて「末尾無空白系統本」とした。そしてその書写のありようから、前者「末尾有空白系統本」が古態性（後補された痕跡）を保とうとしていることを述べ、そこに伝本の優位性を見いだそうとしていた。しかしながら、空白に対する意識のありようは説明できても、それが本文の古態性にそのまま繋がるものであるのか、後補であることを示す状態を保存していることが本文そのものの古態性まで保証するのか、そして本文の古態性（さらには優位性）

は本文そのものから導き出されるべきではないのかなどの理由から、拙稿では後世の本文の解釈を示すことになる漢字表記の質、量を判断の根拠にして論じたのであった。

本稿では、中村（2022）に続いて、先に提示した各伝本の相対的な関係性（承空本群、彰考館本群の二つのグループ、下記の分類表参照）を踏まえ、本文の表記の面からその特質（古態性）を考察するものである。加えて古態性それ自体を論じることが可能であるかにも言及したい。

【「篁物語」「小野篁集」伝本の分類】

	書名	写本
彰考館本群	篁物語	彰考館甲本・彰考館乙本・京都大学本 A
承空本群	小野篁集	承空本・書陵部本・京都大学本 B

調査する対象は、音便などの本来の表記形から変化しているものである。表記の揺れを本文の質と関係させて考察していく。引用する本文は、中村一夫「承空筆『小野篁集』による校訂本文作成の試み」（『国士館人文学』第8号、2018年3月）に示した校訂本文により、頁数と行数を記した。また原本の確認、翻刻は、平林文雄・財団法人水府明德会編著『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字文責・総索引』（2001年）および財団法人冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 承空本私家集 上』（2002年）に収載の影印を使用した。

二 新旧の語形

篁と異腹の妹は深い間柄となり、稲荷詣でのエピソードの後、ついには子をなしてしまうことが語られる。

- ①かく夢のごとある人は、妊みにけり。書読む心地もなし。「例の障りせず」など、うたてある気色を見て、この兄も、「いとほし」と見て、人々春のことにやありけむ、ものも食はで、花柑子・橘をなむ願ひける、知らぬ程は、親求めて食はず、兄、大学の主するに、「皆取らまほし」と思ひけれど、二三ばかり、畳紙に入れて取らす。(100-6)

深く心を通わせていた篁と女は、逢瀬を重ねるといふ夢のような時を過ごした結果、女が子を身籠もるといふ事態を引き起こした。何も喉を通らなくなった女は、ただ柑橘の類だけを願い、事情を知らない親はそれを求めて食べさせる。篁自身も饗応の場にあったそれらをすべて手に入れたいと思うものの、わずかに二つ三つばかりを「畳紙」に包んで、女に与えた。

この出来事を語るくぐりに見える「畳紙」の箇所は、彰考館本群では「たゝみかみ」、承空本群では「たゝうかみ」という本文を持つ。校訂された漢字仮名交

じりの本文では異同は解消してしまい、両群の特徴が消えてしまうことになるが、元々の表記に注目すると、その違いは明白である。「畳紙」はもともと「たたみかみ」であり、「たとうかみ(たたうかみ)」は『『たたみがみ』の変化した語』(『日本国語大辞典』第二版)と、各種の辞典類で説明されるものである。『日本国語大辞典』の「たたみかみ」の項目の用例として掲げられるのは、まさに『篁物語』のこの箇所であった。とすると、一般的には善本とされる彰考館本群の本文がより古態性を保ったものであり、承空本群はそれより新しい後世のものということになるのであろうか。

試みに新日本古典文学全集を検索対象とするジャパンナレッジで用例を拾ったところ、19作品(中古9・中世6・近世4)に「畳紙」の用例が確認される。それらのうち宇津保物語や蜻蛉日記、枕草子、源氏物語、とりかへばや物語などの中古の用例に当たると、「畳紙」に「たたうがみ」のルビが振られているものが17例、「たたみがみ」のルビが6例、ルビなしが1例であった。なお「たたみがみ」のルビはすべて源氏物語の用例である。ただし源氏物語の用例を原本に立ち返って確かめると、室町期書写の大島本(新全集本の底本)は「たゝみかみ」であっても、他の諸本、たとえば鎌倉期書写の陽明文庫本や御物本では「たゝうかみ」と異同を見せており、必ずしもすべての写本が同じ語形で記されているわけではないことが知れる。そもそも新日本古典文学全集では、作品ごとに凡例の記述に違いはあるものの、原則として校訂者の判断により難読語や読み誤りやすい語に任意にルビが振られているようであり、これをもってただちに時代性や正当性を押し量ることはできないだろう。

ここで確認したいのは、「たたみがみ・たたうがみ」のように、もとの語形とその変化した語形が複数の写本の中で異同を見せている事実の存在することから、その新旧の語形が本文の成立や古態性を考える手がかりになりはしないかということである。

次に形容詞連用形の語形に異同が現れるものを見ていくことにする。

②さて、あしたに、久しう書読ませざりければ、父主、「あやしう篁が見えぬかな」と言ひて、呼びにやるに、おどろきて、例の書かき集めて教へけるままになむ、この女のみ心に入りて、僻事をのみなむ、しける。(97-25)

ひさしう(承)　ひさしく(彰)

篁は異腹の妹に漢籍を教える役目を仰せつかる。12月中旬のある日、しばらく篁が女に勉強をさせていなかったのも、女の父親は篁を呼びつけた。いつも通り漢籍を集めて教えていたところ、篁は女のことだけが気になって、間違いばかりをしてしまう。下線部「久しう」の箇所は、承空本では「ひさしう」、彰考館甲本では「ひさしく」の本文を持つ。両群の本文を比較しても物語の展開を異にするほどの大きな違いはないとするのが通説であり、ひとまず領けるところであ

る。しかし、拙稿で調査した表記レベル（漢字の使用）の差異を拾い上げれば、かなりの異同と両群それぞれのまとまりを確認することができた。この音便形か否かの違いも同じ種類のものであろう。以下に音便形の異同を任意に掲げる。

- ③君は、綾の搔練の単襲、唐の薄物の桜色の細長着て、花染の綾の細長折りてぞ着たりける。髪はうるはしくて、丈に一尺ばかり余りて、頭つきいと清げなり。顔もあやしう世人には似ず、めでたうなむありける。(98-9)
 めてたう(承) めてたく(彰)

- ④ 誰がためと思ふ命のあらばこそ消ぬべき身をも惜しみとどめめ取り入れず。帰りて、「かくなん」と言ひければ、かしこうして、またまた行きて見れば、三四日物も食はで、ものを思ひければ、いとくちをしう息もせず。(100-32)
 かしかう(承) かしこく(彰)
 くちおしう(承) くちおしく(彰)

いずれも物語の筋書や内容についての情報量という面では相違ないが、承空本がウ音便の形になっているところ、彰考館甲本ではもとの語形を保っている。これは両本が属するそれぞれの群の諸本においても同様であった。

ここで、承空本および彰考館甲本に見える形容詞連用形の表記を確認する。右の一覧表は、この物語に連用形で出現する形容詞(ク活用・シク活用)を登場順に中央の列に配し、その左右に二本の伝本の状況を「●」で示している。「●」を付したところが音便形で記されている。たとえば一行目の「ひさし」は先に引用した①の用例である。承空本では「ひさしう」、彰考館甲本では「ひさしく」となっている。

この一覧表から、承空本が形容詞連用形でウ音便を多用し、彰考館甲本ではもとの語形を使っていることが明らかに知れる。承空本では全23例中17例(約74%)がウ音便となっており、他方、彰考館甲本は8例(約35%)に留まる。また承空本ではほぼ全編にわたって満遍

彰考館甲本	形容詞	承空本
	ひさし	●
	あやし	●
	めでたし	●
	うるはし	
	あやし	●
	いそがし	
●	ものさわがし	
●	まがまがし	●
●	あし	●
●	あやし	●
●	いとほし	●
	いとどし	
	ひさし	
	わかし	●
	いみじ	
	むつまし	●
	あし	●
	かしこし	●
	くちをし	●
●	かなし	●
	かしこし	●
●	いかめし	●
●	ひさし	●

なく出現するのに対し、彰考館甲本では第一部の稲荷詣でのくだりと、第二部の末尾に近いところのみ偏って現れている。さらに承空本では「わかし」「かし

こし」などのク活用の連用形にも音便が見えているのに、彰考館甲本ではいっさいそれがない。彰考館本が音便形になっていて、承空本がそうでないものはわずかに「ものさわがし」1例のみである。

この音便形の使用状況から、もとの語形を多用する彰考館本群が古態性を保っていることと取ることができるのか。しかし、本文の性質を考える上で、非音便形がより古態を保っているかどうかにはわかには判別できない。なぜなら規範意識の強い書写者が音便形ではなくもとの語形を選んだ可能性も考えられるからである。それはすなわち後世の者が本文に手を入れたことになる。むしろ音便形を多用する承空本群は平安中期から後期の物言いとしてはより自然な形であるともいえるのであった。

伝本によって音便形になるかならないかは、物語の内容、筋書きの面からは問題にならない。しかし、いかに書くかという表記レベルにまで立ち返った時には、明確に書写意識の差が浮かび上がってくると考えられる。もともと音便は発音上の便宜に従って音が変化するもので、日常の話しことばである口語体に多く出るのであるから、いわゆる文語体よりもくだけた物言いとなる。ではそこに異同を見せることにはどのような意味があるのだろうか。またなぜそういう現象が生じるのであろうか。次章ではそのことについて考えてみたい。

三 揺れる音便

根来(1977)では、源氏物語の青表紙本と河内本を比較し、「形容詞の音便現象を調べ青表紙本とは何か」ということを考察する。形容詞の音便は奈良時代から連用形にウ音便が、連体形にイ音便が現れてくる。9世紀終わりから次第に現れ始めた連用形ウ音便は、源氏物語が成立する平安中期頃には相当行われていたと考えられている。『源氏物語大成校異篇』(1953～54)所収の底本(大島本他)によって調査をした根来は、次のように説く。

平安女流の他の文学作品をも見合せて、源氏物語の青表紙本でいまいウ音便化率が二八・九%であること、そしてまたウ音便化しやすい形容詞が「いみじう」「いたう」「をかしう」「あやしう」「心苦しう」「なつかしう」「いとほしう」「口惜しう」「あさましう」など感情の揺れ動きが烈しいときに現れる諸語で、これらの語だけで全ウ音便の半数に達すること、こうした点を見ているといかにも平安中期のそれらしく、このウ音便は作者紫式部の筆によると考え、それをのちの伝承書写者がそのまま伝承し書写したと考えても何ら不審はないのである。

ただしこれを巻別に調べてみると、ウ音便の現れようが一様でないこと(10%未満～50%超)が明らかになるともいう。いったい形容詞連用形のウ音便はどのような場合に現れるのか。根来は上記論文において、山田(1913)や時枝(1936)

などの論考をもとにして、「述語格を保持しながら修飾語になる連用形に現れる」ということを述べた。しかしながら、これが古代日本語における歴史的事実だとしても、巻ごとによるウ音便化率の多寡は説明しきれない。そこでその揺れを書写活動の際の行為、すなわち音便形をもとの連用形に戻すことがあるという事実を確かめるために、平安時代末に成立した明覚『悉曇要決』の記述を読み解き、それに従って「音便形はつねに非音便形に回帰可能なものである」と指摘した。

形容詞連用形のウ音便および表記の揺れについての確認がいささか長くなった。根来の調査対象は鎌倉時代以降に書写された源氏物語の写本であったが、『篁物語』が成立したと想定される平安後期 11 世紀末頃には音便形が広く使用されていたと考えても不自然ではない。ともあれ、もとの形と音便形とは書写者や発話者によって任意に動く可能性があることを抑えておきたい。

この事実を踏まえると、音便形が多く使用される承空本の本文は、この作品が成立した平安後期の頃の日本語のありようをよく反映しているといえるのではないか。一方の彰考館甲本では、音便形よりもとの語形が維持されることが多く、これは書写に際して規範性が強く意識された結果だと見ることができる。規範意識の強さということでは、伝統的な和歌の表記においては音便形が現れにくいことも思い起こされる。もとの語形を保持するのは、もちろん書写に際して使用した親本の本文に導かれてということが大きいのであろうが、音便形は非音便形に回帰可能であることを考慮すれば、彰考館甲本の方に書写者の規範意識が反映されていると捉えられることもできるだろう。もっといえば、後世の手が入った本文になっているともいえるのではないか。すなわち古態性という点からは、むしろ音便形が多用されている承空本の方にこそよくそれが保存されていると考えることができるのであった。形容詞連用形を親本に忠実に受け伝え書き写していったのであれば、異なる諸本の間でこれほどのアンバランスが生じるはずがない。やはりそこには書写者の書き写す意識、つまりは彼らの意識の内にある規範性に原因があると考えられる。

さらに思い起こしておきたいのは、承空本の書写態度についてである。『冷泉家時雨亭叢書第六十九巻 承空本私家集上』（2002）の解題によると、「承空本が資経本の本文を忠実にとどめようとしているのである」とあって、承空は書写に際し、親本の本文を保とうとしていると説かれている。これは承空が写した『小野篁集』においてもその意識や姿勢は堅持されていると考えるのが穏当であろう。残念ながら、承空が親本として使用した資経本『小野篁集』は現存しないため、状況証拠からの判断としかいえないが、音便などの一時的な音の変化の記述にしても、承空が独自に書き換えたと考えたより、もともとがそうであったと想定する方が無理がないと思われる。承空の時代、すなわち鎌倉初期よりもさらに遡る頃（たとえばウ音便がすでに普通に行われていた平安後期）の日本語のありよう

をそのまま伝えていると考えてもよいのではないだろうか。

四 さらに揺れる語形

前節までで形容詞連用形に音便形と非音便形（もとの語形）が現れ、承空本群と彰考館本群での異同から、それぞれの本文のありようを考えてきた。本節ではそれ以外の揺れる語形をいくつか取り上げ、さらに両群の差異を見ていく。

- ⑤この男、いとをかしきさまを見て、すこし馴れゆくままに、顔を見え、物語などもして、文のてういふ物を取らせたりけるを見れば、角筆して歌をなん書きたりける。(97-6)

かうひち（承）　かくひち（彰）

- ⑥かう教ふる中に、角筆して、「かやうの物の書は、僻事つかまつらむ。この頃はもの覚えずや。(97-27)

かうひち（承）　かくひち（彰）

「角筆」という語は、松野（2017）によれば、平安時代の文学作品には『篁物語』の2例しかない。⑤⑥がその2例である。角筆は漢籍の学習のために用いる筆記用具の一種で、木や竹で作った棒状の先端を尖らせて、紙面を引っ搔く形で文字や訓点を記したり、それらを指し示したりする道具であった。通常は「かくひつ」と呼ばれるものであるが、彰考館本群では「かくひち」とされる。そして承空本群ではさらに「く」を「う」と表記している。「角筆」という語自体が平安時代の作品（除『篁物語』）にはまったくみられないのであるから、これを「かうひち」と表記することが実際にあったならば、貴重な用例といえるだろう。副詞「かく」のウ音便化した「かう」と記述するのに引かれてのことであるかもしれない。ウ音便を多用する承空本群では十分考えられることである。

- ⑦「道あひ人の、知りも知らぬ人に、文通はし懸想じ給ふ人の御心にこそありけれ。かの人は、御妻にやがてあはせ奉らん。仲人こそよからめ。許され給ひては不用ぞ」など言ひければ、「なでう、目にかつかん。いかに知りてか、ともかうも思はん」。(99-16)

ふよふ（承）　ふよう（彰）

篁と懇意になった女は願掛けのために稲荷詣でをする。そこである男と知り合うことになる。⑦は行きずりの男である兵衛佐との仲を疑う篁が、女に対して忠告めいたことを述べるくだりである。「不用」は「ふよう」であるが、彰考館本群ではそのように記すのに対し、承空本群では「ふよふ」とされる。仮名遣いとしては彰考館本群の表記が本来の形であり、承空本群のそれは逸脱したものになっている。歴史的に語中語尾のハ行であった音節が、ワイウエオ等で発音されるものをハ行転呼音と呼ぶ。「ふよう」を「ふよふ」と記述するのは、10世紀以降に顕著になるそれとは異なる現象であるが、これに連動する異同（ハ行音とワ

行音の關係の混亂がもたらした結果) であると考えられよう。本来の表記である彰考館本群の本文が古態性を有しているとするのは簡単であるが、『篁物語』の成立が11世紀後半であるとするならば、平安中期以降盛んになった現象の影響を受けた「ふよふ」の表記も十分ありえる。両群の本文のうち、どちらが古態性を保っているかは、にわかには判断しがたいのである。同様の例を続けて掲げる。

⑧さて、この頃、妹のある屋に行きたりければ、いと悲しかりければ、寝にけり。(102-14)

いもふと(承) いもうと(彰)

⑨「世を知らざらん人は、さやうにも言はでこそあらめ。見つかずの御ありさまや。心うし。思はずなり」など言へば、妹いとおしうて、「なにか目にちかざらん人を、しひも見給へと思はん」とて、入りにけり。(99-12)

いもと(承) いもうと(彰)

「妹」は物語中に6例が確認できる。彰考館本群ではそのすべてが「いもうと」と記述される。一方の承空本群では「いもうと」が4例で、「いもと」「いもふと」と書かれるものがある。それぞれの群の中での異同はない。⑧は⑦の「不用」の異同と同じ事情が考えられる。もとの語形は「いもうと」で、語中の「う」が「ふ」に書き改められている。この例もハ行転呼音とは異なる現象であるが、平安中期以降のハ行、ワ行の音と記述の關係の混亂から生じたものであろう。⑨の「いもと」は「いもうと」の転で、平安時代以前から用例を確認することができる。ためにこの「いもと」も単なる誤写あるいは後世の改変と簡単に断ずることは難しい。

前節の形容詞連用形の音便形や上記⑤から⑨の用例を検討するにつけ、承空本群の本文の表記がいずれも本来のものから変化している、乱れていると判断するのはたやすい。しかし、見てきたように、承空本群のそれぞれの表記には、平安中期以降に盛んになった現象に影響を受けたと説明できるところがあり、むしろそのこと自体が本文の内包する時代性、もっといえば古態性をうかがわせていると考えることもできるだろう。整いすぎている彰考館本群の本文こそ、後世の賢しらによる改変があるのではないかと、逆に疑われもするのであった。これは源氏物語の伝本の事情とも似通ったところがあると思われる。整った姿を見せる青表紙本系、河内本系の本文に対し、乱れていたり整合性の取れていない本文を有する別本の諸伝本に、平安時代の痕跡を見いだす可能性があるとするのは、よく知られるところである。

五 おわりに

もとの語形に対して、乱れていたり変化していたりする承空本群の本文にこそ、平安時代後期の姿がある、古態性を有していると述べるのは、少々強引であるとの批判のあろうことは承知している。ただ承空本群の本文の有する姿は、いずれ

も平安中期以降に盛んになった変化、言語的事実として説明がつくものであった。

もちろん彰考館本群の方に乱れた語形をみせる用例もある。「まうで(承)」を「まで(彰)」、「よさり(承)」を「ようさり(彰)」、「ふるまひ(承)」を「ふるまい(彰)」とするものなどである。さらに撥音表記となりやすい「む」「らむ」「けむ」などの推量の助動詞も、

む (承 12、彰 8 [乙本ではうち 7 例が「ん」]) ん (承 20、彰 24)

らむ (承 4、彰 0) らん (承 0、彰 4)

けむ (承 3、彰 2) けん (承 1、彰 2)

というように、彰考館本群の方に多く撥音表記を確認することができた。

「む」は、上代から多く用いられている。中古にも盛んに用いられたが、[mu] → [m] → [n] という音変化によって、「ん」と発音・表記されるようになった。ただし、和歌などには「む」の表記が保たれている場合が多い。散文の表記での「む」と「ん」との使い分けは、個人の恣意による部分も多いように思われる。(『研究資料日本文法 助辞編 (三) 助詞・助動詞辞典』1985 年)

※下線は稿者による

これらに対する判断はひとまずおくことにするが、二つの群の本文の古態性というものは、相対的な関係の中で揺らいでいるものであって、どちらかが確定的なものを有しているとはいいがたい。

今後まずは『篁物語』『小野篁集』の本文には二つの群があるという事実を踏まえて、その上でほとんど異同を見せない両群の本文の質的な差異を、さまざまな観点から測定していくことが肝要であると考え。個々の表現や表記の違いを比較した時に、どちらが古態性を保っているかを判定するのは恣意的なものになりかねない。決定的にどちらかが古態性を持っているといえるような本文ではないと思われるだけに、その判断には慎重でありたい。どこまでも言語的事実を積み上げて考察を続ける必要があるだろう。

注

引用する本文は、中村一夫「承空筆『小野篁集』による校訂本文作成の試み」(「国士館人文学」第 8 号、2018 年 3 月) に示した校訂本文により、頁数と行数を記した。また原本の翻刻には、平林文雄・財団法人水府明德会編著『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字文責・総索引』(2001 年) および財団法人冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 第 69 卷 承空本私家集上』(2002 年) を使用した。

主要参考文献

- 安部清哉「京都大学文学研究科図書館所蔵本『篁物語』（影印）とその”末尾有空白系統本”の古態性」（「人文」18号、2020年3月）
- 安部清哉「変体仮名字母から見た一写本『篁物語』彰考館甲本 【附載】京都大学文学研究科図書館所蔵本『小野篁集』（影印）」（「人文」19号、2021年3月）
- 松野彩「『篁物語』成立年代再考 「角筆」を手がかりとして」（「国士館人文学」第7号、2017年3月）
- 山田孝雄『平安朝文法史』（1913年）
- 時枝誠記「語の意味の体系的組織は可能であるか」（『言語本質論』1973年、所収）
- 桜井茂治「形容詞音便の一考察 源氏物語を中心に」（「国語国文」31巻8号、1962年）
- 北原保雄「形容詞のウ音便 その分布から成立の過程を探る」（「国語国文」36巻8号、1967年）
- 根来司「源氏物語青表紙本の本文」（『源氏物語枕草子の国語学的研究』1977年、所収）
- 中村一夫「承空筆『小野篁集』による校訂本文作成の試み」（「国士館人文学」第8号、2018年3月）
- 中村一夫「『篁物語』諸伝本の分類と古態性についての試論」（「国士館人文学」第12号、2022年3月）